

親鸞の信心観

——「信巻」の信——

貫名 讓

序

親鸞思想において「信心」は非常に重要な意義を持ったものである。古来より多くの学哲によって研鑽がなされてきたことを見ても明らかである。その親鸞の「信心」を見ていく上において、先ず着目しなければならないのは「信巻」であろう。第十八願の場で弥陀と衆生との関わりが語られている。「信巻」にこそ、親鸞の信心観の体系的基盤が示されているからである。しかし従来の見解では、獲信後の衆生の心が語られている、とされるのみである。確かに信一念釈を中心に、獲信後の衆生の心相が語られている。故に諸見解に見られることはもつともな事である。ただ、弥陀より廻向される信心とは如何なるものか、そして如何にして衆生に至り来るのか、といった点が、従来の見解ではやや明確でないように思われる。そこで私なりに考えてみるに、「信巻」は二重の構造を呈していると思われる。先ず、阿弥陀仏が願ひ、釈迦仏（諸

仏）が証讀し聞くことを勧め説く、その弥陀の願心とは如何なるものか。衆生が聞こうとしている弥陀の願心とは如何なるものかが示される。次に釈迦仏（諸仏）の勧めによつて、弥陀法に出遇い得た衆生の獲信とは如何なるものかが語られる。前者が、大経引文と三二問答を中心に展開されており、後者が、先ず、信一念釈を中心に展開されている。

一、

弥陀の願心が示されている願文諸引文、釈迦仏・諸仏の勧め（証讀、証勸）が説かれている成就又諸引文によつて、弥陀から釈迦仏・諸仏を通じて衆生へと、聞信せしめんとする弥陀法とは如何なるものかが明かされている。それは「一心」に聞けと言う勧めでもある。

弥陀は、「至心・信樂・欲生」の三心を誓った。それを天親は「愚鈍の衆生解了易からしめんがため」に、「一心」でもつて顕わした。なぜなら弥陀の三心は、外でもない「疑蓋

無雜」の一心であり、この真実心を領受するところにのみ、衆生の獲信が可能になるからである。さらに願生心も、「欲生と言ふは、則ちこれ如来、諸有の群生を招喚したまふの勅命なり」と、弥陀よりの廻向として示されている。至心も信樂も欲生も、弥陀の願心であるが故に清淨であり、疑蓋無雜であり、真実心となり得る。「至心・信樂・欲生、その言、異なりといへども、その意これ一なり。何を以ての故に、三心すでに疑蓋雜はることなし、故に真実の一心なり」と、真実の一心である弥陀の信樂が、衆生のもとに至り来つて信心を生ぜしめる。そしてそれは、名号を通して衆生の前に現わる。故に「真実の信心は必ず名号を具す、名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり」と表されるのである。衆生にとつての獲信とは、名号と重なることである。衆生が「南無阿弥陀仏」と称えるその名号には、願力の信心を未だ具してはいない。けれども、それが弥陀からの「招喚したまふの勅命」である自分自身の中で如実に信知し得たとき、すでに願力は具されている。故に、この弥陀の真実清淨なる一心を、ただひたすら一心に如実に聞信していかなんとするところに、衆生にとつての「一心」が問題になつてくる。それが、信一念釈以降に展開される「信卷」後半の問題である。

二、

「信卷」後半の問題は、衆生の獲信、即ち弥陀の心と出遇い得た衆生の心相が語られていることである。三一問答を中心に展開されていた阿弥陀仏の願心を、衆生が聞き信順することができた。その歡喜の心が信一念釈以降において明らかにされているのである。その一端を、成就文等の引用文から窺つてみたい。

大信釈と信一念釈とを比較してみると、成就文の「唯除」の文が信一念釈では省略されている。これは単に再引によることから省略されたというのではなく、獲信し得た衆生にとつては、もはや自らが唯除の機であるかどうかは問題とはならないことを表していると窺える。なぜなら、弥陀の勅命を聞くことができたものは、すでに弥陀の願心の中に生かされているものにほかならない。故に親鸞は、「唯除」の文を省いたのである。

そして何より、弥陀の心と衆生の心が一つになり得たのは、弥陀の名号が開けたからにほかならない。そこで信一念釈においては、「聞」がより詳細に表される。弥陀・釈迦仏・諸仏の聞信せしめんとする弥陀の願心に如実に出遇い得た、即ち「弥陀の声を聞けた」ということを表している。「經に聞と言ふは、衆生仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり」と、聞即信としての聞であることが、さらには、「一念といふは、信心二心なきが故に一念と曰ふ、

これを一心と名づく」等によって、一心に聞いていくことと、衆生にとつての信心とは「一」なるものであると示されていることが窺える。正に、天親が一心と願わした弥陀の願心を、衆生は如実に聞き信順していくところに重要な意義があり、故に「一心これを如実修行相応と名づく」と示されるのである。

三、

「三心即ち一心なり、一心即ち金剛真心の義、答へ竟んぬ。知るべし」と。ここに至って、三一問答より展開されてきた如來の三心と一心の問題、そして信一念釈を中心に展開されてきた衆生の聞と一心の問題の一応の帰結をみる事ができよう。如來の三心が疑蓋無雜の信樂の一心に摂まり、名号でいて衆生のもとに至る。衆生は弥陀よりの「招喚したまふの勅命」としての名号を聞信することによって、真実の心・歡喜の心・願生の心が衆生の中に生じる。名号を通して、弥陀の心と衆生の心が重なる。「弥陀の声（招喚の声）」を聞けと勧める「釈迦仏・諸仏の声（發遣の声）」を聞く。衆生にとつての信樂開發の時、正に、この両者の声を「聞くことができた」時なのである。

結

親鸞の信心觀（貫名）

以上のように、「信卷」は、二重の構造でもつて示されていると考える。前半は、弥陀より廻向される「信」とは如何なるものであるかといった点に重点がおかれ、後半は、その弥陀より廻向される「信」が如何にして獲得されたかといった、衆生の獲信に焦点がおかれていた。従つて、衆生の側でもつて弥陀の願心との出遇いが語られてくる信一念釈において、弥陀の一心と衆生の一心が重なりあう。換言すれば、「疑蓋雜はることなし」き弥陀の真実心（信樂）を、衆生が真に「疑心あることなし」として聞信し得たとき、両者の一心（信樂）が一つになる。「信の一念」とはその瞬間にはかならない。故に、「機無・円成・廻施・成一」の「成一」も、信一念釈以降において初めて語られるものであろうと思う。

〈キーワード〉 信卷、信、三心一心、信一念

（大谷女子短期大学専任講師）